

さいせい ふみんうんどう
「こころの再生」府民運動

小学校 3・4 年

「大切なこころ」を見つめ直して



大阪府教育委員会

「こころの再生」府民運動とは

むかし 昔も今も、これからも、大切にしなければならない5つのこころ

いのち 生命を大切にする

思いやる

かんしゃ 感謝する

どりよく 努力する

まも ルールやマナーを守る

いちど を今一度見つめ直し、

あいさつをする

みぢか と など一人ひとりが身近な取り組みを行うことをよびかける運動です。



子どもたちへ（大阪「こころの再生」宣言より）

きみ 君たち一人ひとりが、多くの生命のなか、「ただひとり」の「生かされている」そんなことであることに気づいてほしいのです。そして、今一度、生命の大切さ、人としてのそんげんの大切さをかくにんしましょう。

よりよく生きるため、自分が一番大切にしたいこと。「一生けん命努力する」「思いやりの心を持つ」「自分にせきにんを持つ」「感謝の気持ち」をわすれない。ひとつでもいいのです。「こころ」のよりどころをたしかなものとするため、自分の『「こころ」のルール』を持ちましょう。決めるのは、君たち自身です。

きぼう もくひょう む ぜんりよく 自分のゆめや希望、目標に向かって、全力で取り組みましょう。「自分の本気」が、自分の未来をひらくのです。大人は、君たちをおうえんします。

やってみなはれ。

しりよう この資料は、「こころの再生」府民運動の『5つのこころ』や『あいさつを大切にす』ことをテーマに、みなさんが自分の「こころ」を見つめ直し、身近なことから始めてみるきっかけになるようにと願ひ作成しました。みなさんの「こころ」にとどくことを期待しています。



もくじ

「いのちの再生」府民運動とは

あの人からのメッセージ 上原浩治さん

あの人からのメッセージ 森脇健児さん

生命を大切に

ぶんきち

ぶんきち

思いやる

さかあがり

さかあがり

感謝する

おじいちゃんのリヤカー

おじいちゃんのリヤカー

努力する

まほうのラーメン

まほうのラーメン

ルールやマナーを守る

だって、はやく見たいんやもん！

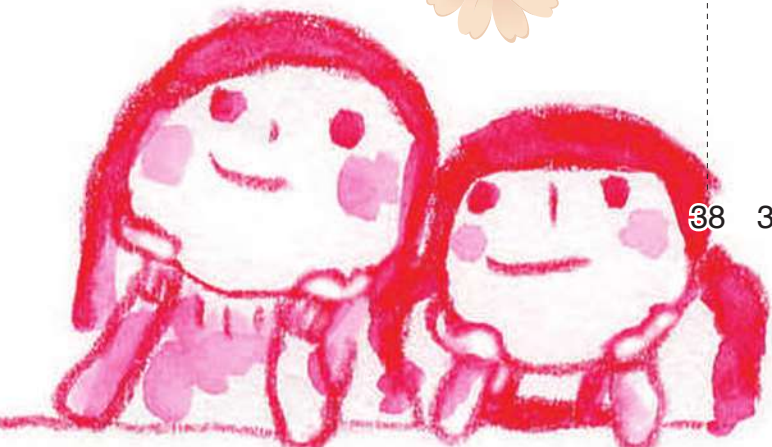
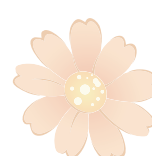
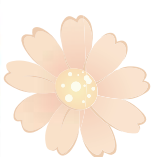
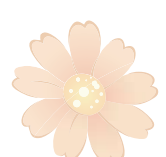
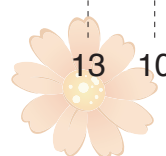
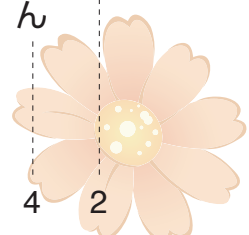
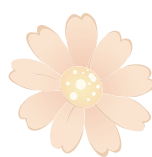
だって、はやく見たいんやもん！

「あいさつ」をもっと大切にしよう

おはようのチカラ

おはようのチカラ

大阪名所 今、昔



25 20

19 14

13 10

9 6

5 4 2

38 37 32 31 26

うえ はら こう じ
上原 浩治さん

あの人からの
メッセージ

みなさん、こんにちは。ポストン・レッドソックスの上原浩治です。わたしは二十三才まで大阪に住んでいました。

おさないころから野球が大好きで、少年野球チームに入っていました。本格的な硬式野球ではありませんでした。高校では甲子園に出場していませんし、チームの中でもひかえ選手でした。一年の浪人生活を経て入った大学の野球部も決して強いとは言えないチームでした。そんなじょうきようだったので、野球選手になるのはむづかしいと思っていましたが、いろいろなことを自分で考えて、努力を続けました。その結果、巨人のドラフト一位でプロ野球選手になることができ、その後大リーグに行き、さらには二〇一三年のワー

ルドシリーズで日本人初の胴上げ投手となることができました。どんなときでも絶対にあきらめないで、努力し続けることが大切です。

しかし、今こうしてプロで活躍できたのは、わたし一人の力ではありません。一生けん命に育ててくれた両親、いっしょにがんばってくれたチームメイトや、学校の先生など、いろいろな方々の支えがあったからこそです。わたしは、今まで支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを絶対にわすれません。みなさんも自分を支えてくれる周りの人への感謝の気持ちをわすれず努力すれば、自分の目標やゆめにもグッと近づくことができると思います。がんばってください。

上原 浩治 (うえはら こうじ)

●1975年4月3日生まれ。大阪府出身。東海大仰星高校時代は外野手兼控え投手。1年浪人して大阪体育大学に入学。1998年、ドラフト1位で読売ジャイアンツに入団。新人1年目に20勝4敗の好成績を残し、最多勝、最優秀防御率、最多奪三振、最高勝率の投手主要4部門を制し、新人王と沢村賞を受賞。2008年の11月にFA宣言でメジャー挑戦を表明し、ボルティモア・オリオールズと契約。FAとなった2012年オフに、ボストン・レッドソックスと契約し、2013年のワールドシリーズでは日本人初となる胴上げ投手となる。



もり わき けん じ 森脇 健児さん

あの人からの
メッセージ

こんにちは。タレントの森脇健児です。先日、カンボジアで開かれたアンコールワット国際ハーフマラソンの十キロメートルの部に参加してきました。結果は九位、毎日走ってトレーニングしているから四十七オオでもがんばれました。目標を持ってがんばっていたら、自然と結果はついてきます。練習をするとき、苦しいこと、つらいこともありませんが、努力を続けることで少しずつ次の段階に上がっていくような気がします。みんなも好きなこと、やりたいことを何か見つけてがんばってほしいと思います。あきらめずに続けているとその先に楽しみや喜びがきくと待っていてくれます。がんばってね！

日本にいと水道のじゃ口をひねるとききれいな水が出たり、スイッチ一つで電気がついたり、お湯がわいたりします。当たり前のように思うことですが、どこかであれかが働いてくれているおかげです。お金をはらってくれているお家の人、水道や電気の工事をしてくれた人、水を作ったり、発電している人たちもいます。自分たちの生活を支えてくれている人たちは、周りにたくさんいます。ぼくはいつも周りの人におつかれ様ありがとうございます、お先にどうぞという気持ちを持っています。みんなも周りの人に感謝の気持ちを持って、友達と仲良くして、がんばってね。

森脇 健児 (もりわき けんじ)

●1967年2月5日生まれ。大阪府枚方市出身。日本全国を飛び回り、テレビ・ラジオに幅広く活躍。最近では「森脇健児陸上競技部」を発足し、2008年には、北海道から沖縄までの約2700キロメートルを1年間で走破。また、海外のレースにも参加するなど、月間250キロメートル超のトレーニングや大会への参加等、タレント活動と並行してアスリートとしての活動にも力を入れている。2013年6月には京都で「森脇健児リレーマラソン」を初開催。453チーム、約3000人のランナーが参加し、大成功をおさめる。



1 ぶんきち

「お父ちゃんたいへんや！ ぶんきちがけがした。」

エリの大声を聞いて、お父さんが飛んできました。

「何があったんや、エリ。」

「あんな、ぶんきちが外に出ようとして、ガラスまどにぶつかってしまってる。」

文鳥のぶんきちを鳥かごから出し、部屋の中で自由に飛ばせていたときでした。ぶんきちは、とう明のまどガラスに気づかず、いきおいよくガラスにぶつかってしまったのです。気を失ったのか、ゆかに落ちたぶんきちはピクリともしません。エリは、ぶんきちを手の平に乗せて、おろおろしてしまいました。

「わたしが悪かったん。ちゃんとカーテンをしめておかんかったから……。」

お父さんが言いました。

「これはあかん。エリ、病院に連れていかな。」

「ああ、これは……。」



ぶんきちをみたじゅう医さんが小さな声で言いました。エリは気が気ではありません。

「ぶんきち、治りますか？」

そう言うお父さんに、じゅう医さんが首をかしげながら言いました。

「……むずかしいですね。両方の羽のほねが折れて、おなかの中もきずついているようです。やるだけのことはやってみますが、覚ごはしておいた方がいいと思います。」

エリは、それを聞いて、体中が急に冷たくなっていくような気がしました。

しん察を終えたあと、待合室のベンチにすわりながら、エリはぶんきちのいない鳥かごを見つめていました。なみだがポロポロ落ちてきます。泣いているエリを見て、待合室にいた知らないおばさんが、エリに声をかけてきました。

「どうしたん？ そんなに泣いて。」

エリは何も言えません。

お父さんがエリの代わりに言ってくれました。

「この子の文鳥が大けがしてしまって……。治らんかもしれんです。」
おばさんが、「まあ。」と目を丸くし、エリに向かって言いました。

「かわいそうになあ。治なおるとええなあ。
もしあかんかったら、新しい文鳥を買か
うてもらい。」

それを聞いて、エリはぐっとくちびる
をかみしめました。なみだがわいてきます。

「……ぶんきちは世界せかいに一いちぴきや。」

お父さんも、うなずいて言いました。

「そやな。お前の言うとおりや。ぶんきちは
家族かぞくの一員いちいんや。きっと治る。」

エリは、お父さんの顔をじっと見て、それか
ら大きくうなずきました。





ぶんきち

● 「ぶんきち」を読んで考えたこと

生命を大切に
する



校舎こうしゃがグルンとさかさまになるのがおもしろくて、一郎いちろうは何度なんどもさかあがりをした。となりの鉄てつぼうで、クラスメイトの将太しょうたが、一郎に負けまじと何度もさかあがりをしている。

一郎は、五回も連続れんぞくでさかあがりをして、それからようやく鉄てつぼうから手をはなした。

「どや、将太。連続五回さかあがりやで。」

一郎のとなりで、将太がはあはあ息いきをしている。ニヤリと笑わらって、将太が言った。

「なんや。おれなんか七回連続やぞ。」

一郎と将太は仲良なかよしだけど、何かにつけていつもはり合っている。クラスのみんなの中には、まださかあがりができない子がたくさんいるけど、一郎と将太はいっしょにたくさん練習れんしゅうして、上手じょうずにさかあがりができるようになった。だから一郎は鼻高々はなたかたか。かっこういいさかあがりを見せたくて仕方しかたがない。

放課後ほうかご、校庭こうていの鉄てつぼうで、一郎と将太がさかあがりをして遊あそんでいると、クラスメイトの明あき弘ひろが、一郎たちのとなりの鉄てつぼうにやってきた。グルングルン気持ちよさそうに回まわっている一

郎と将太をちらちら見ながら、自分もさかあがりができるようになろうと、練習しているみた
いだ。

でも、何度やっても明弘はうまくさかあがりができない。あせを
かきかき鉄ぼうにつかまっている明弘を見て、一郎はなんだか
おかしくなってきた。

——ぼくや将太だって、毎日練習してやっとでき
るようになったんや。そんなにかん単たんに
できるはずないやろ。

明弘が手をすべらせて、鉄ぼうのすぐ下の地じ
面めんにしりもちをついた。

——ほらみい。できっこないんや。

しりもちをついたままの明弘に、将太が話
しかけた。

「どうしたん？ うまくできへんのか？ よっ



「しゃ。コツを教えたるわ。」

将太が、明弘の手をとって立ち上がらせた。明弘が、照れくさそうに、おしりのところをパンパンはたいてすなを落としてる。

「ぼくがささえたるから、安心してぐるーんって回ってみ。」

明弘が、将太にささえられて、鉄ぼうをグルンと一回転した。そして、うれしそうに笑って将太を見ている。

一郎は、その様子をじっと見ていた。

「おれ、かっこう悪いな。」

一郎は急にはずかしくなった。





さかあがり

●「さかあがり」を読んで考えたこと

思ふ



3

おじいちゃんのリヤカー

夏休みになって、ぼくと妹のふみかはひさしぶりに、おじいちゃんの住むいなかにやってきた。

おじいちゃんは、お父さんのお父さん。

おじいちゃんの家は古くて、まるでひみつ基地きちみたいな屋やが※いろいろな物をおさめておく小屋のこと。あったり、近くに川ながが流ながれていたりしておもしろい。

ぼく達たちはたんけんごっこをすることにしました。まず最初さいしょはな屋なだ。

な屋なの中うちは暗くらくて、すごくほこりっぽい。柱はしらのスイッチを入いれると、オレンジ色の明あかりりがな屋なの中うちをぼんやり照てらした。いろいろな木箱きばこと、畑仕事はたけじごとに使つかうたくさんの道どう



具ぐが見えた。

「いたっ。」

ふみかがころんだ。ゆかに置おいてあった
自じてんしゃ転車のタイヤにつまずいたみたいだ。

タイヤのとなりには、青いシートに包つま
れた、何か大きなものが立てかけてあった。
シートをどけてみると、それはずいぶん古
い感かんじのリヤカーだった。リヤカーの大き
な箱はこにはタイヤが一つしかくっついてい
なかった。

「リヤカーや、こわれてる。」

ぼくはどうしてこわれたリヤカーをすて
ずに置いてあるんだろうと思った。ふみか
も足のいたみをわすれてリヤカーをめずら
しそうに見ていた。



おやつの時間になり、おばあちゃんがえん側がわにすいかを持ってきてくれた。お父さんとおじいちゃんもえん側にやってきた。ぼくはふみかといっしょにすいかを食べながら、お父さんにリヤカーのことを聞いた。

「けいたもあのリヤカーにお世話せわになってるで。

小さいときに、おじいちゃんがお前まへを乗のせて

遊あそんでくれたんや。」

ぼくはこわれて動うごかないリヤカーに自分

もお世話せわになっていると聞いておどろいた。

「ちよっと待まつときや。」

おばあちゃんがそう言うと、二階かいに

上がっていった。

やがておばあちゃんは古いアルバム

を持ってきて、ぼく達たちに見せてくれた。

「おじいちゃんとおばあちゃんの家



が、ずっと農家のうかをしてたのは知っ

てるやろ？ あのリヤカーはな、

おじいちゃんがしゅうかくした野菜やさい

を運はこぶために使つかっていたものなんや。」

アルバムの写真にはおじいちゃんが

畑はたけの前まへで、野菜をいっぱい積つんだリヤカ

ーの横よこでポーズをとっているすがたが写うつっ

ていた。写真しゃしんの中のおじいちゃんは、わか

くて、がっしりしていて、今のおじいちゃん

よりもお父さんおとうさんににっていた。

「あのリヤカーはな、おじいちゃんにとっては思い

出しなの品しななんや。それでな、その野菜を売うってお前まへた

ちのお父ちゃんおとうちゃんを育てそだてたんやで。だからお父ちゃんに

とっても、すごくありがたものい物ものなんやで。」

ぼくは、おじいちゃんが一生めいけん命めいリヤカーを引ひいているすがたを想そ



像ぞうしてみた。おじいちゃんはずっと畑はたけで仕事しごとをしていたんだ。おじいちゃんがあのリヤカーで働はたらいて、お父おとうさんを育そだててくれた。そのお父おとうさんも今、働はたらいてぼく達たちを育そだててくれている。ぼくは心こころの中で言った。

——おじいちゃん、ありがとう。



(文…資料作成ワーキング会議編 絵…黒須高嶺)



おじいちゃんのリヤカー

● 「おじいちゃんのリヤカー」を読んで考えたこと



4 まほろのラーメン

土曜日の午後、四年生の純はいとこの高志にいさんとラーメン屋さんに行ってきました。お店の前には、たくさんの方が行列を作っています。純たちも列にならんでいました。いろいろ話しながら待っていると、高志にいさんが思い出したようにたずねます。

「純、野球はどうや。」

純はうつむいてしまいました。純は一年生から野球チームに入っているのですが、上手な子がたくさんいて、なかなか試合に出してもらえないのです。明日の練習もあまり気が進みません。

——もうやめてしまおうか。

そうなのやんでいるところでした。

そんな純の思いを察してか、高志にいさんは言います。



「まあ、うまいかへんこともあるよな。でも続けることがかん心やで。」
グー。純のおながか鳴りました。

「それよかにいさん。ぼく、おなかすいた。こんなにならぶんやったら他の店行こう。」

「なんや、まだならび始めたばかりや。純はしんぼうが足りんな。」

笑いながら高志にいさんが言います。純はなんだかはらが立ちました。

「ちよつとのがまんくらい……、ぼくだってできるわい。でも今はすぐに食べられる方がええんや。」

そう言うのと、純はだまってしまいました。そんな純をちらっと見ると、高志にいさんはさらに言います。

「だったらインスタントラーメンにしとけばよかったなあ。お湯を注げば三分や。」

純はムスツとして何も答えません。すると、高志にいさんは純のかたに手を置いて言いました。

「知っとるか、純。インスタントラーメンはなあ、こんな行列から生まれたんやで。」

「えっ？」

純には意味が分かりませんでした。高志にいさんは話を続けます。

「昔、安藤百福さんって人がいてな。戦争が終わってすぐの冬、寒い日のことやった。まだ大

阪の町は焼け野原で食べ物も十分に無いころでな。そんなとき、町に長い行列ができとったのに安藤さんは気づいた。その先に何かがあるのかと見てみると、それはラーメンの屋台やっ
たんや。」

「そんな昔にもラーメン屋さんがあったんか。」

「そうや。しばらくして、安藤さんは事業で大きな失敗をしてしまった。昭和三十年代の前半やったかな。これからのことになやんどったとき、頭にうかんだのは、あのとときの屋台と行列やった。そしてラーメンをすすつとる人たちの幸せそうな顔を思い出したんや。みんなが必死に食べ物を求めるすがたを、安藤さんはわすれられなかったんやなあ。」

そのことは、純にも何となく分かりました。

「みんなを幸せにできるラーメンを作ろう——。そう決めた安藤さんは家のうらの小屋で一人、研究を始めた。ところがや。安藤さんは、それまでめんもスープも



安藤百福の研究小屋の様子 (再現)

作ったことがなかったんや。必死で勉強して、何度も作り直してな。『おいしいラーメン』を作るまでに一年くらいかかった。」

「やったこともなかったのに、ラーメン作ろうとするなんて無茶や。」

「そうかもな。けど安藤さんの研究はまだここからや。おいしいだけでなく、安くて、安全で、だれにでもかん単に作れて、長持ちするような『まほうのラーメン』……それが安藤さんの目標やった。」

その『まほうのラーメン』が今のインスタントラーメンなんだと純は気づきました。

「ほしたり、いぶしたり、塩づけにしたり、とにかくアイデアは全部試した。でも来る日も来る日も失敗ばかりや。ほとんどねる時間もなかったらしい。きっと苦しかったやろな。」

—— だったらやめてしまえばいいのに。

純は心の中で思いました。

「それでもな、純。安藤さんはずっと研究を続けたんや。そして、ついにお湯を注ぐだけでできあがるラーメンを完成させた。しかも、その後改良を重ねて、容器に入って具までついた『カップめん』を作り上げた。」



スーパーにたくさんの種類のカップめんがならんでいるのを、純は見たことがあります。外国でもその国の味や具材にあわせたカップめんが作られていると聞いたことがあります。うどんや焼きそばだってインスタントのものがあります。

「安藤さんのおかげでいつでもどこでもおいしいラーメンが食べられるようになったなあ。それに、阪神・淡路大震災でも東日本大震災でも、カップめんは大活やくしたんやで。」
そう言うと、高志にいさんはにっこりと笑って、純のせ中をやさしくポンとたたきました。
——苦しいからってと中でやめてしまったら……。
純は小さくつぶやきました。

「明日、練習に行こう。」

そう心に決めて、純は青い空を見上げました。





まほうのラーメン

●「まほうのラーメン」を読んで考えたこと



努力する
なつと
へん

5 だって、はやく見たいんやもん！

天王寺動物園で、ジャガーの赤ちゃんが生まれたと聞いて、きみこはいてもたってもいられなくなりまして。生まれたてのジャガーはきれいなブチをしていて、子ねこみたいにかわいらしいのです。きみこは、早速お父さんをお願いして、次の日曜日に、動物園へ連れて行ってもらうことになりました。

日曜日の天王寺動物園は大勢の人で大にぎわいです。ジャガーの赤ちゃんを見ようとするとする人たちがたくさん集まって、何重にも人のかべができていました。きみこがどんなにせのびをしても、ジャガーの赤ちゃんのいるガラスケースの上の方が見えるだけで、赤ちゃんのすがたは見えませんが。大勢の人はみんな、家族や友達と話をしたりしながら、人が動くのをずっと待つ



天王寺動物園

ているようでした。

「お父さん、ぜんぜん見えへんよ。」

きみこはほおをふくらませて言いました。お父さんもおどろいたような顔をしています。

「うひゃあ。こりゃあ、人の頭を見に来たようなもんやな。この人だかりじゃあ、赤ちゃんを

見るまで、どれだけ時間がかかるか分からへん。」

お父さんの言葉ことばを聞いて、きみこはがまんができなくなり
ました。

「お父さん、わたし、ちよっとジャガーの赤ちゃん見てくるわ。」

言うなり、きみこは、にぎっていたお父さんの手をはなし

ました。お父さんがあわててきみこに声をかけます。

「あっ。ダメやぞ、きみこー！」

きみこは、ジャガーの赤ちゃんが見たくてたまりません。大

勢の人の足のすきまをぬけ、りようて両手で平泳ぎひらおよみたい

に分け入って、なんとかガラスケースの前までやってきました。

子どもを連れた男の人と、大学生くらいのお姉さんの間にぐ



いっと顔をつっこんで、きみこはガラスケースの中をのぞきこみます。

いました。黒と黄色のブチをしたジャガーの赤ちゃんが、子ねこみたいに丸まってスヤスヤとねむっています。きみこは思わず、「わあ。かわいい。」と声をあげました。

人がきのずっと向こうから、お父さんがきみこをよぶ声が聞こえました。

「きみこお。もどってこおい。」

きみこは、お父さんに「はあい。」と答えて、ニコニコしたまま思いました。

——お父さんも、こっちに来てジャガーの赤ちゃんを見ればいいのに。

ジャガーの赤ちゃんが、ふわあと口を開けてあくびをしました。きみこは、ジャガーの赤ちゃんのかわいい仕草がもっと見たくて、ガラスケースに目をこらしました。

すると見えたのです。

「あっ」





きみこは手の平で口をふさぎました。きみこよりずっと小さな男の子が、たくさんの人の方で、ぴよんぴよんはねながら、なんとかジャガーの赤ちゃんを見ようとがんばっています。きっとぜんぜん見えないだろうに、その子はお父さんと手をつないで、人が動くのをずっと待っているのです。

きみこは、大勢の人のし線が、せ中につきささっているような気がしてきました。後ろをふり返ることはとてもできませんでした。

ガラスケースにうつるきみこは、どんとどんとうつむいていくのでした。





だって、はやく見たいんやもん！

●「だって、はやく見たいんやもん！」を読んで考えたこと

ルールやマナーを^{まも}る



6 おはようのチカラ

通学見守り隊のおじさんの「おはよう。」を知らない人はいない。

毎朝、学校の前の横断歩道のところに立って、次々とやってくる小学生たちに、一人ずつ「おはよう。」「おはよう。」と声をかけてくる。

「おはよう。今日はええ天気やな。」

「おはよう。どや。ちゃんと宿題やってきたか？」

「おはよう。もうすぐ学校が始まるで。急いで急いで。」

ぼくは、おじさんの「おはよう。」がちよっぴり苦手だった。はずかしくて、

「おはようございます。」

と小さな声で答えるだけで、早足で通りすぎ



ることが多かった。

クラスの友達も、みんなそそくさとおじさんの前を通りすぎていった。

それでもおじさんは「おはよう。」と、毎朝、子どもたちに声をかけ続けた。

今日、ぼくは朝から熱っぽくて、お母さんに言おうか言うまいかまよっていた。今日は大好きな体育があるし、お母さんに心配をかけるのがいやだったから、ぼくは平気なふりをして家を出た。ところが、通学路を歩いているうちに、どんどん寒気がひどくなり、歩くのがつらくなってきた。いつものおじさんが、元気に「おはよう。」「おはよう。」とあいさつしている。

ぼくにも声をかけてきた。



「おはよう。ええ天気やな。」

「……おはよう、……ございます。」

小さな声しか出なかった。するとおじさんの顔色がサツと変わって、

「なんや。体の調子でも悪いんか？」

とぼくにたずねてきた。ぼくが、

「朝からちよつと熱っぽいんや。」

と言うと、おじさんはぼくのおでこに手を当てて、

「こりゃあかん。」

とつぶやいた。

「ええか。学校に着いたら、先生に言って保健室に行

くんやで。無理したらあかんで。」

心配そうな顔でそう言われたから、ぼくは、学校

に着いてすぐに、たんになの先生に体調が悪いこ

とを言った。やっぱりカゼのひきはじめだったみ

たいで、早退することになって、お母さんにお



かえに来てもらった。おかげでぼくは、カゼを
こじらせずにすんだのだ。

あとでおじさんに聞いてみた。

「あのとき、なんでぼくが体調悪いのん、分かった
ん？」

おじさんはワハハと笑わらいながら答えた。

「そんなん、あいさつの様子ようすですぐ分かるわ。『おはよ

う。』は正直しんじつなんやで。」

ぼくは、ふうんと思った。

それから何日かたった朝、いつものようにおじさんが声をかけてきた。

「おはよう。」

でも、おじさんの「おはよう。」が、今日は元気がなかった。

「おじさん、どうしたん？ 元気ないやん。」

ぼくがそう言ったら、おじさんはびっくりした顔をした。



「やっぱり分かるか？ 昨日の夜に熱が出てなあ。」

と言って「ふう」とため息をついた。

「やっぱり『おはよう。』は正直や。」

「ははは。ほんまやな。おじさんも見守り隊が終わったらお医者さんに行ってくるわ。」

「うん。おじさん、体、大事にしてや。」

そう言うぼくに、おじさんは、

「ありがとう。」

と言ってにっこり笑った。





おはようのチカラ

●「おはようのチカラ」を読んで考えたこと

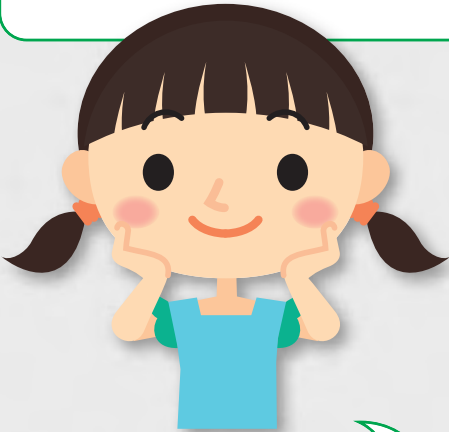
「あひま」をもって大切にしよう



しんさいばし 昔の心齋橋

はせがわ このぶ しゃしんのす めいじ
長谷川小信画「心齋橋真写之図」(明治6年)

えど じだい てんか だいどころ ぜんこく もの すいろ つか
江戸時代に「天下の台所」とよばれ、全国からたくさんの物が集まった大阪は、水路を使っ
て物を運ぶ商売がとともさかんでした。大阪じゅうにはりめぐらされていた水路のうち、
ながほりがわ はし おか だしんさい
長堀川の北と南をつなぐため、橋をかけたのが「岡田心齋」。そして橋につけられた名
前が「心齋橋」でした。明治時代のはじめ、1873年(明治6年)に、もくせい てつ
木製の橋から鉄
製の橋にかけかえられ、まさに、ふんめいかい か しょうよう
文明開化の象徴とされていました。



今の心齋橋

1909年(明治42年)に、鉄製の橋から石づくりの橋にかけかえられていた心齋橋は、
1964年(昭和39年)に長堀川がうめ立てられるのに合わせて歩道橋となりました。
しかし、その歩道橋も平成時代に入って取り去られ、今はモニュメントとして、めいばん
銘板と橋柱が残されています。ふくげん
復元された心齋橋の柱には、りょうがわ しんさいばし し
両側に「心齋橋」、「志んさいばし」
ときざまれています。



おお さか めいしよ
大阪名所、今、昔
むかし



さいせい ふ みるんどう
「こころの再生」府民運動

小学校3・4年

「大切なこころ」を見つめ直して

指導助言者 杉中 康平 四天王寺大学准教授

「こころの再生」府民運動の趣旨を盛り込んだ道徳教育資料作成
ワーキング会議（略称：資料作成ワーキング会議）メンバー

向井 正明	大阪府教育委員会主任指導主事
浅井 美佐	大阪府教育委員会主任指導主事
澤田 章	大阪府教育委員会指導主事
藤田 卓也	大阪府教育センター指導主事

発行：大阪府教育委員会

〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目

平成27年3月

イラスト ●アフロ/EASTNINE/イラストAC/井川ゆり子/
小田啓介/黒須高嶺/塚越文雄/藤田ひおこ

写真 ●アフロ/金田啓司/GYRO PHOTOGRAPHY/
天王寺動物園/日清食品ホールディングス/PPA
